

ルーヴル美術館が所蔵する膨大な絵画蒐集のなかから、主に十九世紀前半のフランス絵画の傑作を厳選した展覧会が、現在開催されている。よくぞこれだけの粒よりの名品を一堂に揃えたものだ、と驚嘆するほかない傑作、本邦初公開の品々が、文字通り目白押し。会場を一周するだけで、その充実ぶりに果然とさせられた。日本側、フランス側相互の関係者の信頼と意気込み、そして表現への弛まぬ努力に、まず冒頭で深い敬意を払いたい。以下、同時代の「東方」の関心の高まりに重点を置き、展覧会の一部を鳥瞰してみたい。

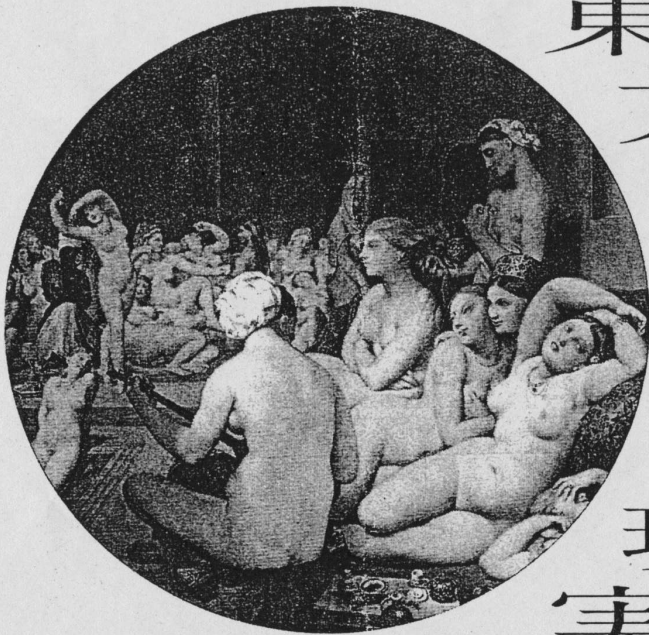
展覧会が始まる、フランス大革命からナポレオン戦争にかけての動乱期の雰囲気を生々しく再現する。ロベール・ルーリーの『聖バルテルミの虐殺』など、過去の凄惨な殺戮の場面を描いた何枚もの歴史画のなかで、新古典派の重鎮、ダヴィッドの『マラーの死』（アトリエ）の時事性が異彩を放つ。マラーは「人民の友」と慕われた急進派。その暗殺事件現場が、劇的な道具立てを排除した静謐な空間の内に浮かび上がる。

時代特有の色彩。シロデの『エンデュミオン』習作では、月光に男性裸体が照らし出され、同性愛的感情をすら暗示させる妖しげな魅力を滲ませている。

若き軍事的天才ナポレオンの勇姿は、クロの即興の肖像習作『アルコレ橋上のボナパルト将軍』が、生き生きと伝える。クロ男爵はエジプト遠征の記念画家として著名で、『馬具をつけたアラブ馬の習作』にもその技量は明らかだ。

フランソワ・アンドレ・ヴァンサンは『ヒラミッドの戦い』習作も、方形陣を組むフランス軍に襲いかかるトルコ軍の騎馬隊の壊滅の様が、淡彩の粗描きで活写されている。

東方への夢と現実



ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル「トルコ風呂」
1859～63年 © Photo RMN-G.Blot/C.Jean

ルーヴル美術館展に寄せて

稲賀 繁美



いなが・しげみ 国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授
1957年東京生まれ。主著に『絵画の黄昏』、『絵画の東方』（ともに名古屋大学出版会）など。

悠久なるヒラミッドは、ドラクロワとともに十九世紀前半のフランス画壇を代表する、新古典派の後継者、アングルもまた、東方趣味に深く関わった。若き日の『スフィンクスの謎を解くオイディプス』のギリシア趣味と、『泉』に代表される健康な女性裸体と。その両者が、モンタギュー夫人の書簡を参照して空想した、トルコの公衆浴場を舞台に結びつく。かくして結実したアングル晩年の『トルコ風呂』は、西欧世界における性的な東方幻想の到達点を成す。

これに対して、フロマンタワは一八二四年の『キオス島の虐殺』につづき、二七年のサロンに『サルタナパロスの死』を出品する。ニウェ陥落を目前にしたアッシリアの大王が、部下に命じて宮廷に火を放ち、寵姫や愛馬を始末させ、その阿鼻叫喚の様を象の寝台で悠然と見守る。この古代東方歴史絵巻の習作には、画家の創作本能が一向呵成に発露している。

同様の暗い激情は、ドラクロワがギリシア神話に取材した『怒りのメデア』やウォルター・スコットの『アイヴァンホー』に立脚した『アン・パル騎士団によるレベッカ略奪』にも受け継がれる。またアングル派の神童、と呼ばれたシャセリオーは、ドラクロワのお株を奪う画題に北アフリカ滞在の記憶を加味して、勇壮なる『アラブの騎士の戦い』を描く。

＊
「ルーヴル美術館展 19世紀フランス絵画―新古典主義からロマン主義へ―」は18日までに、横浜美術館で。30日～10月16日、京都市美術館に巡回。

文化

